

2011年3月5日

図書新聞

3004号



器の開発のみならず、そのソフト的な応用として「ユニバーサルサービス」(サービスという語は行政の上から目線の用語なので、サポートという語がいいのでは)として展開されていっていること、それは図書館や郵便事業での取り組みとして現れていることなどが書かれています。

さて、わたしがかつて読んだ本とリンクする話を書きおきます。パティ・ラッド『ろう文化の歴史と展望——ろうコミュニケーションの脱植民地化』(明石書店、二〇〇七年)という本の中で書かれていたこととです。今、ろう教育の中でバイリンガル教育ということが突き出されてきています。それは手話には書記言語がなく、音声言語の書記言語とのバイリンガルになるということとで進んでいるのですが、この『ろう文化の歴史と展望』の本の中で、なぜ、モリンガルでいけないのかという突き出しをしているのです。で、書記言語ではなく、ピテオという形で記録や情報伝達していく方法を提起しています。バイリンガルということでの抑圧性の批判です。これらは、書記言語のない音声言語のバイリンガルにも通じていくことです。さらに、読み書きだけでない、言語そのものの抑圧性を問題にする論点もあります。たとえば、ドナ・ウィリアムズの『自閉症だったわたしへ』(新潮社、一九九三年)の中で、自分たちの『自閉症の世界』を『感覚の世界』ととらえ、言葉の世界との違いを書いています(わたしはそれを『言葉の世界』から『感覚の世界』への抑圧と読み解いています)。

さて、話が余計混乱しそうなので、わたしのコメントを挿入します。識字にしても、これは自体にしても、それが抑圧的に働くのだから、破壊するというのが論理につながっていくのでしょうか？

それは、この本の中でも出てくる能力主義の問題にもつながっています。「できる」ということは能力主義として過剰に反応するひとつもあるのですが、この本の中でも展開されているのですが、「できる」ということと自体が問題になっているのではなく、「できるべきだ」ということが問題になっているのです。

この本の話に戻せば、情報(反障害研究会主宰、反障害―差別別論研究・運動家)・娯楽へのアクセスが「障害者」にとって保障されない中で、不利益ということが起きる。つまり、そもそも益―不利益ということがある社会があるから、いろいろな「できないこと」が障害者にとっていくのです。

今、いろんな二一三をとり返し、アクセシブルになる方法が追求され、ハード、ソフト両面から障害を取り除こうとする動きがこの本の中で詳しく出ています。ですが、「今、ここで」という取り組みがすすんでいるとしても、それがユニバーサルな形で広がっていません。そのことがその問題です。だから、なぜ広げられないのかということとを考えると、そこから社会の構造を変えていく取り組みと共に、ユニバーサルということとをとり返す必要があるのではないのでしょうか？

かなりの本から離れたことを書いてしまいました。この本は、かなり専門的な論点として手にするひとが少ないことが心配されます。しかし、この本はほんとうにいろいろなことを考えさせてくれる大切な本です。

識字運動の抑圧性を超えて ユニバーサルデザイン的な途を示す

益―不利益がある社会では「できないこと」が障害になる

三村洋明

この本は五人の著者による論文集ですが、障害学の「社会モデル」の立場でつなげられた一つの本になっています。まず、部落解放運動の中で取り組まれ、広がった識字運動をとらえ、識字運動というものがもたらした抑圧性になることを押さえています。たとえば、「文字は空気がである」というレトリックが、同化主義的差別であると指摘します。そして、日本においては識字率が高いとか、近世後期にすでに識字率が高かったとかいうことを神話としてとらえ、批判しています。漢字ということと自体がもつ日本語のむずかしさをとりあげ、手書き文字の「身体をめぐる」抑圧性も指摘しています。文字はひととあらわす」ということで

示される抑圧の構造です。わたしがもっとも注目したのは、識字を個人の問題にしないで、「障害学の社会モデル」の立場にたつて問題を突き出している点です。そして、そのことを識字のユニバーサルデザインから、更に情報のユニバーサルデザインの話へと展開していきます。ユニバーサルデザインというのは、かつてはみんなが共有できるひとつのものとして出さねばならないとされていまいた。で、きたら、そうしたいのだけれど、この本では、それは不可能だとして、ひとつのものとして出されるのではなく、多様なニーズに合わせ、多様に出される必要があるとしていることです。今様々な取り組みがなされているし、機